Mobile Workation Spot

―“竹の復権”と“竹と共に生きる社会”に向けて―

プロジェクト名：Mobile Wokation Spot

主要用途：ワーケーションスペース

建設予定地：和歌山県白浜町

ワーケーションプロジェクト

主構造様式：竹造

主要仕上材料：竹集成材

建築面積：10m²

工事予定期間：2021 年

放置竹林問題に対して各地域で多くの取り組みが行われているが、抜本的解決に至っていない。その大きな理由は、古くから身の回りで用いられてきた竹材のほとんどが工業製品に置き換わり、利用価値が見いだされなくなったことにある。

私たちは「生きる自然は地域を育む」ことを理念として、ものづくりを通して地域、人、社会に貢献すること、竹の新たな価値を見出し、新しい生活スタイルの提案をすること、という 2 つの目標の下、地域や行政と連携した“竹林保全”を通じて地域社会への貢献、環境および地域に高い意識を持つ未来の人材育成、“竹による新たな建築や作品開発”を通じて竹の魅力を社会に伝え新たな付加価値の創出、新たな生活様式の開発を行っている。それにより、人々に地域愛、自然愛が芽生え、地域が豊かになり、竹産業が振興し、竹林がよみがえる。地域が自立して豊かな竹林を維持できることを設定し、最終的には“竹林の復権”と“竹と共に生きる社会”の構築を目指している。

プロジェクトの概要

このプロジェクトは“竹林の復権”と“新しい未来社会”を築く、その先駆けとなる小さな試みである。

依頼者は自身の有する広大な自然園地を利用したワーケーション事業を企画しており、「ワーケーションオフィスのサテライトとなるスポットを竹で作って欲しい」と依頼があった。

ワーケーションとは、“ワーク”と“バケーション”を組み合わせた造語で、観光地やリゾート地でリモートワークを活用し、働きながら休暇をとる過ごし方のことであり、ポストコロナの「新しい生活様式」のひとつとして注目されている。

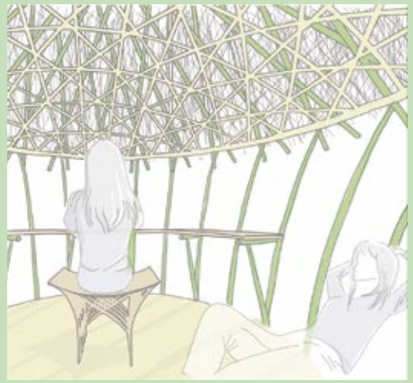
依頼者はその立地を生かしてコロナ以前より“新しい働き方”としてワーケーションに注目してきた。

この建築は、利用者自らが竹林に分け入って竹を伐採し、自ら組み立て、自ら運び、自ら建築する“おひとり様”空間である。

自ら自然に分け入って作業することで自然を知り、自ら組み立て移動することで新たな生活スタイルを考えるきっかけになる。

構築する部材は自然な丸竹に加え、加工した部材を用いている。自然竹と、素材の特徴をフルに活かした加工竹の適材適所の組み合わせにより、竹という素材の新たな可能性を引き出す。

この小さな建築をきっかけに、竹の新たな価値が見いだされ、新たな生活スタイルが定着し、竹産業が振興することで豊かな地域と自然が育まれることを目指している。



“竹林の復権”と“竹と共に生きる社会”の構築に向けて

—２つの理念と５つの戦略—

日本全国の各地において、放置竹林は社会問題化している。竹は成長が早く、しなやかな性質を持ち合わせていることから、古くから生活のなかで身近な存在として活用され、多くの竹が植えられた。しかし、海外からの安価な材の輸入やプラスチックなどの代替品の出現により、国内における竹の需要が減少した。さらに、竹林を整備する人の高齢化や担い手の減少などの影響が放置 竹林問題を加速させた。私たちは、「ものづくり　まちづくり　未来づくり」をテーマに、ものづくりを通して人と地域の未来を考える活動を行っている。活動のきっかけは宮城県気仙沼市における被災地復興を基盤とした活動だった。東日本大震災後、唯一資源としてあった竹を用いて地域の方々が集まる場所を自らで築き、そこを拠点に被災地の子供たちの心を支え、学生と地域の子供が共に学び共に成長する活動を行ってきた。現在では滋賀県における放置竹林の環境再生活動を軸として活動を行っている。放置竹林による自然環境の悪化に対し、竹林の自然環境改善の向上を目的として、学生と地域の方々が協力して行っている活動である。この活動から竹林保全を行い、竹林と地域が共存する地域社会を実現したいと考えている。放置竹林の解決には継続的な整備、すなわち、竹林が資源として活かされなくてはならない。その手掛かりとして、今まで見いだされていなかった竹の新たな価値を生み出すための研究開発、その特徴を活かした新たなライフスタイルの提案を行っている。竹建築を通したコミュニティの形成・自立の促進、新たな竹材や構法の開発によりこれらのプロジェクトを発展させ、最終的には竹の復権と、生活様式のニュースタンダードの確立を目指す。そのため、２つの理念と５つの戦略を示す。

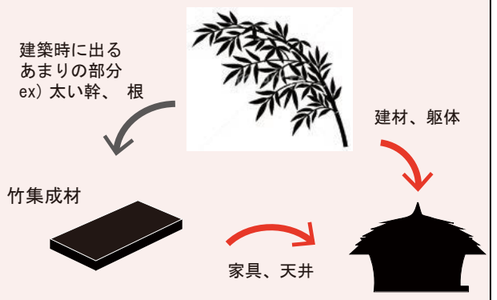
Mobile　Workation　Spot

新型感染症とライフスタイルの変化

新型感染症の流行に伴い、リモートワークという 働き方が社会に定着した。自由な働き方、仕事時間、通勤時間の短縮などメリットが多い一方で、労働者 は新たな課題も抱えている。それは、自宅が仕事場になり、プライベートとの区別が難しくなったことだ。職場に行けず、外出も出来ない状況では、プライベートとの切り替えを自分の意識で行わなければならない。そのなかでうまく切り替えが出来ず、ストレスを溜め込んでしまう人も多いだろう。

ワ—ケーションと放置竹林

本提案は竹を使ったワ—ケーショ ンスペースである。自宅と離れ、自由な敷地、竹という自然素材を使った建築のなかで日常から離れた 空間での働き方を提案する。竹という材料さえあればどこでも建築が可能であるため、敷地は利用者が自由に設定することができ る。建築作業はセルフビルドとし、建築システムは 素人でも施工可能なものとする。組み立て・解体が可能で、トラックに載せてどこにでも運べる。この建築には 1 本の竹を余すことなく使う。根の太い幹は基礎に、上部の細い幹は側面のルーバーに、笹は屋根を葺く材料に、躯体にならない余りの竹は 集成材として利用する。100 ㎡程度の放置竹林を整備するには、約 60 本 の竹の伐採が必要である。このワ—ケーションスペースの 1 つ建築するには、約 60 本の竹を消費するため、全国に建てられることで、放置竹林の解決につなげることを期待する。



提案

［理念１］ものづくりを通して地域、人、社会に貢献する

①“地域や行政と連携した竹林維持活動”を通じて地域環境や自然環境について考える

竹の伐採に適した 10 月から 12 月に竹林整備範囲に合った竹の伐採本数の伐採を行う。竹の切り方などの技術の継承も行う。

－市民による竹林維持活動を通じて地域コミュニティの熟成、地域愛を育む

－地域にある身近な自然の再発見

②“ワークショップ開催”を通じて若者の教育及び地域社会に貢献する

私たちが主催するワークショップの最大の特徴は、地域の若い世代に、地域に学び、生きるということ、暮らし、ものづくりについて“等身大”で考える機会を設けることである。

環境意識について頭で考えてもらうだけでなく、実際にフィールドに立ち、肌で感じてもらう。

－実際に体を動かして学ぶ

地域環境
市民による竹林維持活動によって、自然や地域への愛着が生まれる。

自然環境
これまで注視してこなかった新たな自然の再発見。

若者の育成
実際に竹に触れることで経験としての学びを得る。

将来

［理念２］竹の新たな価値を見出し、新しい生活スタイルの提案をする

③“竹による新たな建築開発”を通じて竹の新たな価値を創出する

竹の新たな価値を見出すために、竹の特徴を活かした新たな建築システムの開発を行う。

④竹建築が可能にする“新たな生活スタイルの提案”を通じて地域社会に貢献する

コロナ禍で生活スタイルが変わりつつある中で、竹建築が提案する新たな生活スタイルとして、人力で施工が可能なワーケーションスペースの制作を行う。

⑤“竹の魅力を活かす作品づくり”を通じて竹の付加価値を高める

竹の特徴を活かした家具やアートを開発すると共に、 竹の専門家やアーティストとのコラボレーションによるシンポジウム、展覧会を行い、竹の魅力を社会に伝える。

新たな付加価値
持ち味の再発見
新たな建築、作品、構法の創出

新たな生活スタイル
竹建築が可能にするポストコロナの生活様式
ニュースタンダードオフグリッド

これら一連の活動は、社会的視点においては、ものづくりを通して地域、人、社会に貢献すること。技術的視点においては、竹の新たな価値を見出し、新しい生活スタイルの提案をすること。以上二つの理念の下、行政や自治体、学校等のクライアントを巻き込みながら続けていく。そうすることで竹そのものに対する新たな価値が見出される。それによって地域における竹林は、ただあるだけの場所から、行けば何かある場所へと変わる。これまで得られなかった中間層の関心が得られれば、竹林の管理する力は格段に改善され、外部の介入が無くとも、継続した竹林整備が可能となる。

　この活動が日本全国に広まれば、竹の新たな価値が見出され、竹の需要が高まる。竹産業が振興することで、竹林がよみがえり、かつて生活に至るところに竹が活きていたように、新 しい技術を用いた新しい活用方 法で、我々の新しい生活、ニュースタンダードに竹が溶け込んでくれることだろう。